

猫のいる風景 全編第一〜五話(180枚書き下ろし予定)

第四話 浅草宙猫奇譚

たなか 踏基

400字詰原稿用紙 全編180枚書き下ろし

平成十七年十一月九日脱稿

小春日に木偶打つ鑿のみの刃はもんかな・踏基

自在屋の嘉吉

この話 浅草宙猫奇譚とは、江戸浅草のからくり一座「自在屋」にいた、阿波の美形の娘養太夫師・澤田お梅と、桐生の根っからのからくり好きの機巧師・高橋金治の物語である。

お梅と金治は、共に幕末から明治初期に掛けて、猫の義太夫と猫の機巧りで活躍、最後まで「自在屋」の興行を支え続けた花形芸人である。二人の生まれた場所は、歴史の古い伝統芸能と伝統産業の土地柄で、阿波の徳島、上州は桐生と東西全く異なっていたのだが、共通点は、共に貧乏家庭の末っ子であった点、幼くして家を出てしまった点、何より類稀たぐいまれな天賦の才能に恵まれていたことであった。

澤田お梅は、徳島から二十里も入った阿波池田の生まれであった。阿波の国と言えば、十八世紀より人形浄瑠璃の伝統芸能を受継いできた地域として知られている。家は山地で田畑も少なく、八人兄妹の全員が、将来一家の口減らしのために自律しなければと考えて成長した。まして末っ子の澤田お梅の場合は、五〜七歳にな

ると口減らしで奉公にできるか、人形芝居でこしばいの箱回しの手伝いでもして、遍路のような旅回りに出る他に、活計たしきのたてよつもなかったのである。

阿波の一口浄瑠璃と言って、男も女も老いも若きも、小さい時から浄瑠璃の稽古をする地域であった。祭りの時分になると、百姓そっちのけで、小屋もない菰屋根の野芝居の人形芝居の座が、三十余り結成された土地柄である。中には阿波を捨て、讃岐(香川)、伊予(愛媛)、土佐(高知)を巡る旅回りに浮身をやつす者もいた。四国さえ捨て、遠くは淡路や紀伊、果ては作州・備州(岡山県北部・南西部)や芸州(広島西部)、防州・長州(山口東部・北西部)まで出かける人形芝居の一座もあった。

澤田お梅の兄二人とも難波に出て、活人形いきでこ(人形浄瑠璃の頭を彫る)職人になっていた。当時難波には木偶頭作りとして、人形雅でこまさ 信江の米、助重という三人の名人がいた。信江の米は、女の頭作りであった。その三人に匹敵する木偶頭作りに成りたいというのが、二人の兄の野心であった。女の頭ばかり打つ八歳離れた二番目の兄が、お梅の小さい時からの自慢だった。

昔女芸人になるには、浄瑠璃の語りでも、三味線引きでも、女歌舞伎の役者でも、廓の

女郎のように身を落す所から這い上がるようにして、一人前になる女芸人が多かった。

澤田お梅の場合も、人形芝居の箱回しの手伝いをして、七歳の時に女衞せげんに売られた。だから廓の淵に身を沈めても、不思議ではなかったのである。大阪を跳び越し、はるばる江戸の浅草迄流れてきてしまった。後述「自在屋」の座長自在屋嘉吉に拾われ、女郎になる寸前に娘養太夫の語りをするようになったのは、お梅にとつて寧ろ幸いであったといふべきである。

一方の高橋金治は、元々上州(群馬)の桐生は荒戸郷の生まれで、五人兄弟の末っ子であった。元々この地は、今から千三百年前の奈良時代から知られた全国でも珍しい山絹の産地であった。養蚕農家の高橋家は、生糸の座繰りでした。食べて生けない、地元の貧乏農家であった。

高橋金治が、足尾街道を歩いて古戸に出て、座繰りの親方の吉兵衛と一緒に船便で、利根川を下り江戸に出たのは九歳の時である。

足尾街道は、足尾から桐生を経て、太田の古戸までの街道である。当時江戸へのルートは、古戸から利根川を下る舟便と、一端熊谷(妻沼)に出てから中山道を行く道程の二つがあったが、何れも桐生織物を江戸へ運ぶ要路となつた。

利根川と荒川は、物資を水運で江戸へ届ける重要路であり、川舟が寄港できる港町が流域各所にあつた。二河川が合流する流路は、現在と異なり、江戸湾(東京湾)に直接注いでいた。

当時桐生は、既に養蚕、絹織物の生産と交易の町、徳川家の天領(直轄)となつていたが、絹

織物の日本の中心地は、何といっても西陣織で知られた京都・西陣地方が上であった。

西陣の絹織物は、諸大名や裕福な庶民の評判高く、糸、色目、織、質感の技術のどれを採っても一級品で、桐生織はもとより他絹糸・織物産地も皆後塵を拝していた。

桐生が、織物で幕府の天領になったのは訳がある。鎌倉時代の新田義貞の旗揚げの軍旗に使われた故事に習い、関が原の戦いでも、縁起の良い二千四百十本の桐生織の御絹旗を、職人達が一日で仕上げ、徳川方に上納したのが縁となったといわれている。

小さい時から、高橋金治は機械弄りが大好きであった。七歳の時に座繰り機械の改良、二人座繰りの提案をして親を驚かせている。

座繰り機は、昔から一人で操作され、座繰り機前に人が座り、指先の感覚で太さを確かめ、繭を煮立てた湯鍋から糸を撚って紡くのが従来の方法であった。高橋金治少年の改良により、手順と部品を少し変えるだけで、従来の三倍以上の速度で繭から糸を紡げるようになったといつ。

少年を江戸に連れて行き、見聞を広めさせてやりたいと、座繰りの親方の吉兵衛が、発案し同道した理由は、この改良の事実を高橋金治の父親から聞いて間もなくのことである。特に浅草のからくり芝居を見せたかったようだ。母親は未だ年端も行かない、九歳の少年の江戸行きに大反対したが、男共に説得された。

江戸時代の庶民文化の一つに機巧があった。竹田近江創始の興行(芝居)からくりと異なる、

新たなからくり芝居が、江戸浅草で勃興したのは、幕末から明治期に入ってからであった。

浅草は以来、田谷力三等のオペラ、熱狂的な所謂ペラゴロが闊歩していた大正期、更に喜劇王榎本健一の活躍した昭和期にも、退廃的風潮が蔓延したストリップ劇場全盛の戦後期、大衆演劇が活況を呈す平成期の御世にあっても、依然として芝居に関係ある地域であり続けている。余談であるが、浅草不良といわれたサトウハチロウ、今東光、徳川無声、東郷青児は当然としても、ペラゴロと呼ばれた人の中に、宮沢賢治や川端康成が居たというから驚きである。

興行(芝居)からくりや山車からくりが、日本伝統文化として根を降ろし、現在もなお継承されているのに比べ、座敷からくりや和時計は、人形と時計という夫々別な世界にあつて、極めて特殊な発展をみながら、最後は日本人の心の外へ散逸してしまつた点で一致しているのも、皮肉と言えば皮肉な話である。

当時江戸の書物や引き札(広告宣伝ペラ)の、からくりに関して、機巧、唐繰、繰、機関、巧機、旋機、機振、関振、関鍵、器械等と様々な文字が当てられていた。種類は、興行(芝居)からくり、山車からくり、台付からくり、座敷からくり、時計からくり(和時計)に大別できる。何れも人形との結び付が密接である。

興行(芝居)からくりから、我国独自の人形芝居、人形浄瑠璃(文楽)が生まれた。徳島や高知県では人形のことをペコと呼び、今も江戸や

大阪の人形浄瑠璃とは、一味違つた独自文化「人形芝居」を継承している地方がある。

実は上州の桐生にも、興行(芝居)からくりが残されている。これは物語の主人公、高橋金治や澤田お梅の存在と無縁ではない。この桐生からくりが、現在文化庁による「ふるさと再興事業」の一貫に採択されている。

山車上のからくり人形は、尾張、美濃、飛騨高山他全国各所で繰広げられる、年一度の祭礼の中で、平成の御世でも生き残っている。台付きからくりは、内部機構は簡単で、外部に出た取っ手を回し連動する糸によって、人形が動いたり、鞆や弦によって音がでるものが多い。人形の外見の作りは丁寧で美しい。旧家が門戸を開放し、雛人形と共に公開されていた。

日本の十六世紀、日本列島に伝来した初の科学技術といえば、鉄砲と機械時計であった。鉄砲を大量生産する技術は、織田信長と言う武将の先見性と、鉄砲鍛冶の出現により瞬く間に普及していった。戦国時代という、互いに覇を競う時代革新の時流にマッチしていたからである。鉄砲に遅れること、八年後の機械時計の与えた影響も計り知れない。

座敷からくり(木製口ポット)の機械要素は、天文二十年(一五五一年)にフランススコ・ザビエルが、戦国大名大内義隆に献上した西洋の時計技術と関係が深い。これが当時の尾張地方が和時計の産地となった所以である。和時計の技術や技術者が、やがて日本を代表する始祖、豊田佐吉や田中久重を育んだといえよう。その後

の自動織機の会社の誕生(後のトヨタ自動車)や電気会社(東京芝浦電気)の創業を、江戸時代(明治時代の誰が想像できたであろうか?)

座敷からくりと、時計からくり(和時計)は、特殊なものを除き、兄弟分的な派生をした。

和時計の機構部品が当時から、鉄や真鍮等の金属材料から作られたの比して、座敷からくりの機構はすべて木や竹、鯨の髭の発条という金属以外の材料を使っているところに特徴がある。有名なのが「茶運人形」であるが、両者は機構面で酷似した共通点を有していた。

我国初の機械設計書は、寛政八年(一七九六年)、江戸で出版された「機巧図彙」と言われている。首巻、上巻、下巻三冊から成り、著者は、土佐藩の天文方、細川頼直、通称半蔵である。首巻で、掛時計、櫓時計、枕時計、尺時計を記述し、上巻で茶運人形、五段返人形、連理返人形等、下巻で龍門の滝、鼓笛児童、遙拝鬪鶏等、竹田機関一座の演目、九種類を詳細な図を基に仕組みと制作課程が解説されている。

一頃日本の産業用ロボットの設置台数が、世界の70%を占めると言われたことがあった。現代も二足歩行ロボットにみられる、日本の先進性は、手塚治虫の鉄腕アトムの影響も否定できないが、江戸時代のこうした機巧の伝統や精神に大いに負つ所があるのであるまいか。

江戸時代に大阪道頓堀で発祥した、興行(芝居)からくりは、庶民の間で大人気となり、からくり芝居(機括戯場と称す)は繁盛した。その時の技術が、現在もなお人形浄瑠璃(文楽)

や歌舞伎の舞台に活かされているという。更にせり上がりや回り舞台等の、独自伝統技術が、欧米の劇場にまで伝わっている事実は、非常に誇らしく興味深いものがある。

確かに、竹田一座の興行(芝居)からくりの評判は、花のお江戸まで聞えてきた。

しかし宝暦十三年(一八五三年)以後は、次第に衰退の一途を辿った。経営的にも負債の増大、関係者内紛や小屋の火事が重なり、竹田近江の名跡は継がれたが、次第に新奇工夫もなく、人々から飽きられて人気を失ったようだ。発祥の経緯が、寛政十年(一七九八年)刊行、全十二巻から成る「撰津名所図会」の第四巻に以下記されている。

竹田近江が機括戯場は諸国までも聞て其名高し、其初を原めるに阿波の国に産にして江戸に住みしが、常に浅草の観音に詣して其の立願に多くの人を育養ふ稼穡を教給へといのる。其帰るさに、児童寄りあつまりて砂あそびをして見ると、砂時計の工夫をめぐらし、是正しく靈験なりとて、京都に於いて唐線偶人を製造し、万治元年十二月朔日、雲井まで調進し奉りければ、初て、竹田出雲と受領を拜せり。今より百四十年以前なるべし。其後寛文二年大阪に於て初て機括戯場を願いて興行し、享保十一年五月五日竹田近江と受領を改め、同十四年壬戌九月十九日近江没しければ、其倅三四郎は同年十一月京都にて受領を拜す。寛保二年九月二日、二代の近江

清英死にければ、則弟平助譲り受け、同三年京都にて、竹田近江と成り於今相続す。機括の前芸には、子供を出して、戯狂言を始む。此の芝居世に高く、東西辺鄙の旅人も竹田唐線を見ざれば、大阪へ来たりし験なしと聞えし。

寛文二年(一六六二年)、大阪道頓堀で竹田近江(後に近江)が、興行(芝居)からくりの初演を行なったとある。元時計職人の竹田が児童の遊びより砂時計を工夫して創始興行し、この芝居を見なければ大阪に来たことにならないと言わしめるほどの人気振りであったようだ。

桐生の座繰りの親方の吉兵衛は、芝居の役者が着る衣装や、小屋の旗指物を桐生の糸で織つた織物で受注したいと構想を練る知恵者であった。桐生織物を、江戸の人気役者が着れば、大いに宣伝になると思ったからである。

従つて、界隈の江戸三座に出入りの織物問屋筋は元より、芝居の衣装小道具方とも既に親しかったのである。座繰りの親方の吉兵衛が、少年金治にからくり芝居をみせたのも、この背景があつたればこそである。親方の吉兵衛は、機械好きの少年の才能を既に、この段階から見抜いていたのかもしれない。

高橋金治が後に所属した一座は、「自在屋」と言い、浅草上右衛門町(柳橋)に住む、座長の自在屋嘉吉が率いる、座員十数名の小さなからくり芝居小屋であった。自在屋嘉吉は、少年

少女達を裏方や踊手として上手く使った。最初、高橋金治少年は、吉兵衛の口ききもあって、からくり舞台の裏方人足に採用された。

機械好きの高橋金治少年が一座に入れたのは、そうした理由があった。江戸三座といわれた大きな芝居小屋とは異なり、二、三十名の客を対象にした見世物小屋のような一座であった。

座長の自在屋嘉吉は、同じ上右衛門町にいたことから、当時浅草の平賀源内とも称された発明家、桐澤嘉六翁と姻戚関係にあったと言われたが、この噂話は定かではない。

何故なら、桐澤嘉六翁は、柳橋の紅燈絃歌の時代の波に翻弄された人だからである。翁の組紐機械や煙草刻み器は、俗間に採用された。他に実用には至らなかつたが、十六の杵が同時に動くから曰、座ついても着物が織れる自在機の織機を発明していたので、「自在屋」と縁ある人間との噂が乱れ飛んだのも無理がない。当時根も葉もない噂話は、浅草に五万とあつた。

天保十二年(一八四一年)、老中水野忠邦の天保の改革で、江戸市中にあつた芝居小屋は、風紀を乱すからと浅草猿若町という閉鎖された場所一ヶ所に集められ、新吉原の遊廓のよつに閉じ込められた。町名由来は、江戸歌舞伎の始祖、猿若勘三郎に由来するが、今の浅草六丁目付近にあつた、往時の芝居風俗街の猿若町は、名のみ残つて現在は既に無い。

浅草猿若町は江戸三座、即ち一丁目に中村座、二丁目に市村座、三丁目に森田座があつた。他にも操り人形の人形浄瑠璃、女芝居、幾つもの蠱惑的な見世物小屋があつたという。娘義太夫と自在機の出し物に特徴があつた

「自在屋」は、他の十数軒ほどの一座同様に浅草猿若町に軒を並べていたのである。

最も娘義太夫の全盛期は、もっと後の明治二十年(一八八七年)前後の十年間である。

娘義太夫は、袴姿で日本髪に簪を挿し、人形使いと共演せず、太棹の三味線伴奏で有名な浄瑠璃の一節の「さわり」だけを語る俗称「たれ義太」が熱狂的に流行したのである。何故「たれ」と言つのか不明であるが、「たれ」は、義太夫界の隠語で女性の蔑称であつた。

明治初年段階から、阿波徳島生まれの澤田お梅を、女衞屋の幹旋で十両で入手して、座にいれてから自在屋綾之助を名乗らせた。自在屋嘉吉の興行の先見性は、高いものがあつたと言える。

明治初期に森田座が新富町に、明治二十五年、他の二座も移転して、江戸の一大風俗娯楽センターも消滅し、猿若時代の芝居は三十二年で軒並み終わりを告げたのである。

但し、自在屋の場合は、艶やかな衣装と美形の澤田お梅(自在屋綾之助)の色気で、男の客共を惑わせ、娘義太夫とからくり芝居で、その後の人気は一時的ではあつたが鰻登りであつた。

その人気は、明治時代の半ば頃まで続いたという。もちろん、その自在屋の最後まで、二人の傑出した芸人、自在屋綾之助と澤田お梅の色気と、後日一人前に成長した、桐生の機巧師・高橋金治の猫の宙乗りのからくり機構が華を添えたことは言つてもない。

「自在の魂で、今のからくりを否定しろ！俺等です。自在屋」の生きる道を探すのだ!!」座長の自在屋嘉吉の口癖である。

座長自在屋嘉吉の言つ、自在の魂とは今の言葉で言えば、自由奔放な似非自動化であるつか。

舞台は、自在屋嘉吉の名を欲しいままにした。初めて見た江戸のお客は、その舞台の大仰な水車の仕掛に皆驚愕の呈であつた。

なにしろ、自在機の動きを見世物にして、その前で、機を織る如く派手な衣装をまとつた三人の少女の手踊を見せたのである。少女の色気で売る自在屋嘉吉の着想は、後の娘義太夫にも活かされ、当時のからくり精神から逸脱していたと言つても言い過ぎではない。

「これこそが自在だ!!」と、正に舞台は、座名「自在屋」と座長嘉吉の名を嫌が心でも、お客に認識させて余りあるものがあつた。

初体験の高橋金治が、眼玉をひん剥いて腰を抜かさんばかりにした姿に、吉兵衛は内心にやりとほくそ笑んでいた。金治少年の心の叫び、今で言うカルチャーショックが想像できる。

座繰りの親方の吉兵衛の思惑は、この機械好きの少年が、桐生に帰るよりもきつと一座に入りたいたいと言いつつに違いないと読んでいた。

実を言えば、決して水力で十台の機が、一斉に動いていた訳ではない。大人では背が支えて、ろくろが回せなかつたので、手狭な空間に潜りこんだ、裏方の少年達の人力によつて、ろくろや滑車が動かされていたのである。

連動のろくろや滑車の力で、見せ掛けの舞台中央の大きな水車が回り、水が注がれあかかもその水車で十台の機織機械が、連動しているかの如く、お客に上手く思わせていたのである。正に自在の魂、似非自動化の心骨頂が窺える。この時の「自在屋」の引き札(木版摺りの

チラシ(広告)が、今も「福人宝遊戯^{ふくじんたからゆづぎ}」と題し、「自在機全図」に活写され残されている。

石の上にも三年、十二歳になった高橋金治は、裏方の下積み苦勞を、上州人の粘り強さと侠氣で次第に克服していった。仕事を覚えるより以前に、朝は早く起き、夜遅くまで先輩の雑用の手伝いをした。労役の少年達のいじめを、俠氣で撥ね帰すだけの胆力が、元々身に備わっていたとみえる。二歳年上の少年、森平次郎は、高橋金治が何かと聞いてくる大からくり(舞台機構)に対する疑問に時折応えてやっていた。

森平次郎は、最初の内こそ、先輩面してものを教えたが、やがて金治の疑問に心えられない自分を発見すると一転、以後は「金治」と見下し對抗心を燃やして嫌がらせをするようになった。

高橋金治は、持ち前の手先の器用さと利発さで、そつした裏方少年達を、先導できる人足として頭角を現し始めた。金治が、舞台中央の「自在屋」の看板の大型水車を、少し重くすることを、座長に提案したのが転機となったようである。

この突飛な提案が切っ掛けで、座長の自在屋嘉吉の眼に自ずと留まり、年下の少年達は、皆「金治兄さん！」と呼ぶようになった。

少年の人力で廻る水車であったから、初動時は確かに力が要るのであるが、廻り始めると重い方が、かえって弾み車(フライホイール)の原理で楽になることを知っていた。以後読み書き算盤が、これからのからくり師には必要だと、座長は金治に浅草の寺子屋に通わせた。

座長や道具方の手足となり、新機抜戯場(からくりの新規出し物)の補助をさせられた。

例えば、以下の大からくり(舞台演出)である。せり上がり：ろくろと滑車を利用して台上的役者を舞台にせり上げる。滝車：川模様の布を巻いた車を、回して流れのように見せる。連理引き：はねつるべを利用して、梃子の原理で少女を空中に飛ばす。宙乗り：舞台天上に道を引き台車を置き、台車に回転可能な釣木をつけ、少女を吊るす。少女が宙を飛び回転する。回り舞台：ろくろを人力で裏方が回転させる等・・・。

「自在屋」だけが、大からくり(舞台機構)の全てに熟達していたわけでは決していないが、何と今の歌舞伎座でも行なわれているような大からくり(舞台演出)が、一子相伝の秘伝として、自在屋嘉吉他当時のからくり芝居の座長の手によって創案されていたのである。

江戸時代には、同時期英国のように動力に蒸気機関を利用した産業革命こそ無かったものの、こつした浅草の興行(芝居)からくりには、西洋の工場にも負けない革命が舞台の上で進行していたのである。蒸気機関は無く動力こそ人力ではあったのだが・・・。

茶運人形の絵解き

ある日、昼の興行が終えた後、高橋金治と澤田お梅の二人は、座長の自在屋嘉吉に部屋に呼ばれていた。自在機の出し物に、少し翳りがでて、客足も鈍くなっていた頃である。

江戸時代の舞台の灯りは、行灯と燭台であったから、大方の芝居小屋は、日暮れとともに木戸を閉じ、庶民は暗くなると早々に床に就いた。未だ高橋金治十五歳、澤田お梅は、未

だあどけない九歳であった。子供が居なかつた座長は、この二人に特に目を掛けていた。「お前等二人に、良く言っておきたいことがある。いいか！心して聞けよ。」

二人は、座長の自在屋嘉吉に呼ばれて緊張していた。座卓の横の燭台の灯が揺れていた。一瞬暗くなり、再び明るくなった。灯心の燃える音が、聞えていた。

気配で何事か知らねど、座長の強い意思を聴く覚悟が、二人には出来ていた。何か小言や叱責とは違う別の言葉が、座長嘉吉の口から飛出すものと、既に硬い顔付であった。おもむろに立ち上がった、自在屋嘉吉が、後ろの戸棚から三冊の本を取り出して、笑いながら二人の前に置いた。高橋金治に、顎をしゃくって本を手取るよう促した。

寺子屋に通っていた高橋金治は、多少字が読めたと言っても、中味は難解であった。頁を繰ると、難しい筆字の羅列に混ざって所々に絵図が挿入されていた。むしる惹かれたのは絵図の方であった。感の良い高橋金治は、からくりの絵図であることを直ちに察知した。本は「機巧図彙」の正本でなく、贋本(海賊版)三冊であった。

「どうだ！何の本か金治、お前には判るだろ。お梅はわからないかもしれないが・・・」

「からくりの本です。」

「そつだ！金治、おまえはこれから六ヶ月の間に、今『自在屋』のできる大からくりと組み合わせた新たなからくりを考えるのだぞ！お梅は、浄瑠璃の菊若の家に行け！新し

い演目の台本が師匠のところへ届いてい
るはずだ。それをお梅は、師匠から口伝
で教わるのだ！明日は、今の曾根崎心中
は語らなくていいから・・・」

十五歳の高橋金治と、九歳の澤田お梅の
仕事にしては、これまた頗る難題を突きつ
けたものである。お梅は少女の感で、座長
が浄瑠璃のお師匠さんを、菊若と呼び捨て
にしたのを聞き逃さなかった。素早く耳の
奥に、淫靡な疑問を押し込んでいた。何故な
ら、お梅が始めて師匠の家に入りして以来、
男の気配を感じてきたが、相手はこの座長だっ
たのではあるまいかと推察していたからだ。
困惑顔をして、無言でいる二人に異彩構わ
ず、自在屋嘉吉は続けた。

「金治、お前はお梅の語る浄瑠璃の語りに
合せ、招き猫のからくりを工夫するのだ！
お梅の語る浄瑠璃台本は、お前達も知っ
ていると思うが、浅草吉原京町の三浦屋
で全盛を極めた薄雲太夫の猫の話だ。」
高橋金治は、視線を親方の顔に移した。
「親方！てまえのような未熟者にかような
からくりができませんようか!?」
「馬鹿野郎!!てまえの言い草はきかねー」
自在屋嘉吉の拳骨が、頭に飛んだ。

「.....」
高橋金治は、座長から今迄何度も拳固を
食らってきたが、今夜の拳固はことさら痛
かった。《ちくしょう!!》憎しみとは違っ
た。裡に父に対するような、反骨心が湧いた。
きつとなって、座長を見返した金治の眼には、

何時に無く新たな決意の光が宿っていた。
九歳の澤田お梅は、座長の並々ならぬ剣幕
に、唯おろおろするばかりであったが、自分
の役目だけはちゃんと認識したのである。

此処で、横道に逸れるがお梅が語っていた
「曾根崎心中」の話と、薄雲太夫の話を、夫々
一、二に分けて触れておかねばならない。
「曾根崎心中」の「さわり」部分を抜き語
りでお梅(自在屋綾之助)に語らせていたが、
世の中にあつた話(世話物)という点で、高尾
太夫と肩を並べた、愛猫家の薄雲太夫の二、
の話も、きつとつけると座長は踏んだに違
ない。当時、猫を飼ったのは大店の酔狂なお
大尽人か、花魁等の限定した人々で、職人や
庶民は、愛玩用の猫を飼わない時代である。

自在屋嘉吉の語った、薄雲太夫の話とは、
「近世江都著聞集」に記された、以下二、
のような話で、「招き猫」の逸話ともなっ
て浅草界隈の庶民はもとより、江戸中の大
評判が、全国に波及して行ったのである。

一、江戸初期、人形浄瑠璃界には、竹本義
太夫が不動の地位を築いていたが、興行的には
歌舞伎と競合して遅れをとり不安定であつた。

ともに良く似た外題を演じていた。歌舞伎
の台本作家であつた近松門左衛門は、日本の
中に、観客の身近にいる世俗の人物を登場さ
せた。しかし門左衛門は、冒険を恐れる歌舞
伎界の姿勢や、花形役者が作家よりも上位に
置かれる風潮を嫌い、元禄十六年(一七〇三年)
に竹本座のために、初めて浄瑠璃台本を書い

ている。この台本は、日本の演劇史上、初め
ての画期的な内容となつたのである。

それまでの浄瑠璃台本の登場人物は、歴
史上の人物や英雄達であつたのに対し、実
際に心中した事件をそのまま台本とした。

大阪の醤油屋の手代の徳兵衛と北新地の
遊女・お初との曾根崎天神の森の心中、浄
瑠璃「曾根崎心中」の登場人物は正に市井
の人々であり、行為も極く日常的な出来事
が描かれていたからである。この浄瑠璃を
聞いた庶民は、感涙におよんだのである。
それまでの時代物に対して、いわゆる世
の中の話、世話物浄瑠璃の誕生であつた。

二、江戸時代の浅草吉原の三浦屋抱えの遊
女薄雲太夫は、高尾太夫と覇を競う花魁だつた。
太夫と名が付くと、遊女屋の公娼や岡場
所と私娼とは完全に区別され、今の大スター
並の存在だつた。置屋には、大名、公家、
御大臣等時の権力者や成金達が入り込んだ。
その薄雲太夫が大の猫好きで、花魁道中
にも猫を抱いていた。愛猫のために友禅の
蒲団を作り、緋縮緬の首輪には金の鈴を付
けたとさえ伝えられる。ある日、薄雲太夫
が廁へ入ろうとすると、愛猫がしきりに裾
にまとわりつくようにして引き留める。こ
れを見た三浦屋の主人は、「この化け猫め！」
と猫の首を切り落とした。ところが刎ねら
れた猫の首が宙を飛んで、廁の天井に張り
付いていた大蛇に喰らい付き、薄雲太夫の命
を救った。命の恩に報いて、西方寺に猫塚を
建立してこの猫を丁重に弔つたという。

ある日、馴染み客の一人、日本橋の唐物屋(雑貨商)の主人は、猫を亡くした薄雲太夫を慰めようと、長崎から伽羅の香木を取寄せて、それで薄雲太夫の愛猫の姿を彫って贈った。大喜びした薄雲太夫は、伽羅の猫を片時も離さず、その後の花魁道中の際にも抱いていた。

この噂話は、たちまち浅草中に広がり、猫の模造品が歳の市で売られると、これがまた飛ぶように売れた。芸者の俗称を「ねこ(寝子)」と呼んだ風潮とも相まって、全国の遊女屋・置屋を始め、花街や飲食店の「招き猫」となって置かれるようになったのである。

因みに、白猫は福を招き、黒猫は病を防ぐ魔除、右手を上げた猫はお金を、左手を上げた猫はお客を招くという縁起話を生んだのである。

高橋金治は、「機巧図彙」の贋本(海賊版)三冊を、興行が終わると蝋燭の灯の下で、毎日、暇を見つけ根気良く眺みつけるように眺めた。絵図は感を働かせて、おぼろげながら理解できるものの、どうしても文意が掴めない。寺子屋の師匠に相談と思つたが、これでは興行のネタが世間に知れる。座長に相談は意地でもできない。何としても独力で、座長を見返すのだ!

あれやこれやと思ひあぐねた揚句に、高橋金治は、お梅の浄瑠璃の師匠でもある、菊若に意を決して相談に行ったのである。

台本が読めるのだから、このからくりの絵解きができるであろうと。内心、座長のお妾さんがいるという座員の噂には気が付いていたが、この菊若師匠が、そつだと確信したのは大分後のことであった。その点やはり女

の子であつても、お梅の方が感が鋭かつたといえる。当日お梅も心配顔で付いてきた。

「あー、お梅ちゃん、今日は色男付きかえ?」

「お師匠さん! 違つうの今日は金治さんの御用できたの。あたしが金治さんの付人よ。」

「まあして金治さんとやらが何の用だい?」

初対面の高橋金治は、眩しいもので眺める目付きで、妖艶な菊若師匠に挨拶すると、本を三冊風呂敷から取り出して見せた。

「からくりの本です、文章の意味が判らな

いのです。絵図は見当付くのですが・・・」

「からくり? わたしでわかるかねー」

「金治さんのからくりの舞台で、あたしが浄瑠璃を語るの・・・親方の構想なの。」

お梅が仲介の助っ人として口を挟む。

「へー自在機に手踊りの出し物だけじゃ、駄目なのかえ? 親方も酔狂なことかんがえるお人だねーそれでわたしに薄雲太夫の台本よこしたわけだー」

「そつなんです。」

「どーら、お寄こし。何だか黴臭いねー」

菊若師匠は、ぱんぱんと手で叩いて、その装丁の悪い糸綴の本を、ぱらぱらとめくって暫く眺めていた。二人はその間黙っていた。

高橋金治と澤田お梅が、連れ立って菊若のところに出向いたのは、頗る妥当な問題解決策であった。と言つうのも、それとなく座長自在屋嘉吉に、二人の進行状況が適宜、閨の睦言を通じて伝わったからである。

菊若自身も、座長の新しい出し物の構想に、どうやら興味を覚えたようだった。

「わたしや、浄瑠璃の語りだから、からくり

のことは皆目見当もつかないけど・・・一日じゃ読みきれないから、お梅ちゃんの稽古の日に合せて、金治さんも一緒にいらつしやい。できるだけお手伝いしましょう。その代わりお梅ちゃんの稽古にも必ず毎回付き合つよ。二人ともいいわね!」

「そつします。」

お梅と金治は、こつして菊若師匠の家で、共に行動することを約束させられたのである。

高橋金治は、師匠が読み解いてくれたその文章を、自分の筆で半紙に克明に書き写していった。そうすることで、書いてある内容を理解していったのである。菊若師匠も、始めこそ、ほんの軽い気持ちで協力を申し出たものの、高橋金治の熱意にほだされて中味が判らないまま、次第に夢中になっていった。

以下菊若師匠が読み下した、絵図解説文である。

一日目

「茶運人形」全体 人形の持て居る茶台のうゑに茶碗をおけば 人形向ふへ行く茶碗を取れば行き止る また茶碗をおけばあとへ見返りて元の所へもどる也

「人形内からくり惣図」

前の左の方より斜めに見たる図 前後左右は人形によりて定む 以下みなこれにならふべし (一)は手の上がるのかぎりをなす物也

(二)は(一)に(ほ)は皆人形後へもどる仕組み也 次ぎの分図に詳なり (と)はぜんまいのはし也 (ち)は行司輪の心車也

「同前の右より斜に見たる図」

(い)は手を下ぐるのかぎりをなす也

ま

た行くを止むるものをくくり付る分図に

詳なり(ぬ)鍵をさしぜんまいをしむるなり(ろ)茶碗をとれば行きとどまる仕組也(を)を打付る鉄は左にて心より前へ寄せ打

左は右にて後へよせうつべし是足をこぶと見せる為也また図のごとく端へ首をうごかす糸を付る也(わ)此処へ首をさすなり(か)此くわんへ首をうごかす糸をさす

二日目

「同後より正面に見たる図」

ならばに寸法 但し縦横の寸法は皆内法を記す 以下これにならふ又穴より起るものは其心よりしるす 魁車及び天符旋りを留る仕組等は斜視の図に明なり ぜんまいのとけたる時二の輪の心棒へ当らぬ為に如比横に釘を指し置くなり ぜんまいの端を曲らせてこれへかけてもよし また曲りたるはしを通るものは別に前の方へうつすもよし

「同上より正面に見たる図」

地板惣長さ五寸五分

後柱の上の横梁は皆除に図す 是諸輪見へ

やすきためなり

「分図 是は人形の行く止る仕組みなり」

(い)手に持たる茶碗をとれば軽くなり手先あがるゆへ 此所下りて行司輪に当るゆへ行きとまるなり(ろ)是にて引くゆへ 手さきつねにあがるなり(に)此所へ茶碗をおけば手さきさがるゆへ(い)の所あがり 行司輪へかかりたる所はづれて 車はづれて車めぐるゆへ 人ぎよつむかふへ行くなり 此糸を下へひくゆへ 首を動かしゆくなり なお

惣図と見合せてめうなり

三日目

「左の柱を内より見たる図」

(い)前図のごとく 是にて車をとむる手うへよりおせばくるまめぐる 図にて明なり 右の柱及中柱等別に替りたる仕組もなし ゆえにここに略す 一の輪二の輪の心棒は三本の柱へ皆通る也 但し二の輪の心棒の当る所の中柱は切りかきてよし

「人形後へ戻る仕組」

魁車は船の楫のごとし 此くるま縦に直に居れば人形直に向ふへ行く也 若比車左へ斜なれば左へ斜に行かず 今一の輪周て(い)を推す故に自然と(ろ)管にてつかれて 魁車右へ斜になる其間は斜行しておはりにうしろへめぐりてかへるとき(い)のところはづれるときはあとへ直行するなり 其はずれて直に直行するものは(は)の方へ常に引居るゆえなり

比分図並びに法 左のごとし

「一の輪右より正面に見たる図」

留輪一の輪の左に有 一の輪の心棒のはしへかきをさし(い)より(ろ)にむかつてめぐらせば自由をめぐる 又(ろ)より(い)に向てめぐらすれば(は)にて留りてめぐることあたはず 其次第図にて明なり 故にこれを留輪と名づく 如此めぐらすれば ぜんまい其手前に在てしまるなり そのしまりたるぜんまい戻るに隋て一の輪留輪とともに乾より坤に向てめぐるなり

四日目

「一の輪左より正面に見たる図」

但し行司を添へ 心棒をさし 又其留釘を打たる図也 指渡四寸 歯先より歯先まで歯五十六 或六十にしてよし 初此一の輪と共に此所を周て前図(い)を推し 魁車斜行する也 後此行過て(い)をはなる也 厚さ一分許 此諸道具取はなしの図 左のごとし

但し行司をばづし 其後に残る留輪の釘等の図なり 右より鍵にて一の輪の心棒をねじれば 左右の留輪一時に共にめぐるなり

「一の輪の心棒の図」

鍵をさす所/右の柱の居り所/ぜんまいをさす孔/中の柱の居り所/右の留輪の居り所/一の輪の居り所/一の輪のさし留釘/左の留輪のすわり所/行戻り居り所/左の柱へさす/留輪の内へさすなり

此心棒へ諸輪をさすしだひは まづ右留輪さしとめの釘をさし つぎに右留輪をさし 其次一の輪 つぎ其さしとめ釘 次左留輪 次行戻り次其さし留釘 如此さすべし 其後二本の柱へさしこみ 柱はみな外の諸輪をさしてのち 台板へさすなり ぜんまいはことごとく出来てのちさしこみまくべし

五日目

「行戻の図」

左より見る所なり 此図のうちにとめわあり 弾あり 下の図のごとし

同右より見る所 左の留輪此所に重る弾也 鯨のひれにて作る 此ぜんまいをねじる時

かくのごとく
如此とめられて右へ回ること能はず。ただ留輪心棒と共に周るのみなり。此物ぜんまいをねぢて後其ぜんまいによつて諸輪自然に周る。是別の輪と共に廻りて(い)を左へおす。故魁車斜になることす。前に詳なり。是留輪と其弾有故なり。

「前図の車二輪取合の図」

此左右の添車と云うものに用なし。只柱と車の間をすかす為のみなり。細工の時、取組の次第は、先心棒を柱へさし、次に両添車に阿膠を付さし込置すり及二の輪に阿膠を付さし込一行司輪も是に同じ。諸輪皆檜の木を以て、如此木口を歯先へ向くように仕組裏板へ阿膠にて付てよし。裏板は檜にてよし。此車後より正面に見たる所左のごとし。一の輪二の輪共に皆此向にてよし。ざんまいは鯨のひげにて造るべし。長四尺幅五分厚六七厘位にてよし。細工終りて後、檜を曲げるにてもして帯をし、又装束の車へさわらぬよう仕組をして後衣装をさせ帯をすべし。

* *
高橋金治が、菊若師匠の家に通い始めて数日経つたある日、様子見がてら座長自在屋嘉吉がやつてきた。調度お梅の稽古の最中であつた。

手土産に、菊若の好物である日本橋和泉町虎屋の葛饅頭を持っていた。現在赤坂に本店のある京都より来た虎屋と異なり、猿若町の中村座や市村座の顔見世興行にも出入りの老舗の店の饅頭である。菊若は本名佐奈江と言ひ、母親の辰巳芸者譲りの、捨ててなんぼの生き方と三味線で、江戸前のきつぷのよさを売る女であつた。本所深川育ちであつたが、珍しく芸だけでなく文字の読み書きができた。

「自在屋」を起す時の嘉吉にべた惚れして、女房というより始から芸の三味線と浄瑠璃で自律する妾の方を選んだ女であつた。

嘉吉に色事を仕込まれてから、鉄火肌は陰をひそめ、やや太り肉ぎみの顎から首、肩へと流れる線にめつきり妖しさと色気がでて、浄瑠璃の語りにも艶がでてきたと評判であつた。

「やつてるな。お梅も金治も……」

「あら座長さん！ 今日はどうした風の吹き回しですか？」

「ほら、お前の好きな虎屋の葛饅頭だ!!」

菊若が「あら座長さん」と二人の前で他人めかして配慮したのに対して、嘉吉の「お前の好きな……」で、二人の男女の關係を飲込み、お梅と金治は互いに目配せをしていた。

場に居る四人の間に、何時の間にか家族のような暗黙の和んだ雰囲気が出来上がつていた。

「金治さんは、お前さんの若い時にそっくりだよ。お前さんが、からくりの鬼なら、金治さんは小鬼のようだよ。質問にわたしゃ、些かお手上げぎみだよ。」

菊若は座長をお前さんと呼び、互いの深い關係を公表して誰はばかるところが無かつた。次に菊若は、質問攻めにする金治をこう評し、座長の前で二人をあからさまに褒めそやした。

「お梅はどうだ？」

「お梅ちゃんの筋の良いのは、お前さんも知つてでないかい。流石に阿波生まれは違つよ。」

それに最近は声に色気がでてきたよ。特に金治さんが一緒にいると……普段はこうして、化粧しなくても随分可愛いから、紅を一寸さすだけで十分だけど……唯もう少し、語り

の色気の出し方と舞台化粧の方法を覚えるともつと映えて人氣がでるわね。」

「そうかい。そいつあ良かった。」

菊若は、お梅の顔を見て笑みを漏らした。お梅は、すでに菊若に自分の心の裡を察知されているかと思つと顔が火照つた。この時、まさか金治に就いて、上州桐生まで流れていく運命が待っているとは思ひもしなかつたのである。

お梅は今迄、からくりを操作する金治という少年のことを全く知らなかつた。娘義太夫と自在機の出し物は、時間帯もずれていたし、おまけにからくり之余り興味がなかつたからである。しかし、座長の部屋に一緒に呼ばれて時から、お梅にとつて人生が一変したのである。毎日身近な存在として、金治を意識するようになっていた。

お梅の薄雲太夫の新しい猫の外題の稽古が終わると、嘉吉持参の日本橋和泉町虎屋の葛饅頭を、四人で談笑しながら食べた。

「美味しいねーこの葛饅頭食べたら他のは食べられないねー」

お梅は、懐にもう一つ葛饅頭を懐に捻じ込む金治を促し、二人を残して先に帰つた。以前から義太夫を語り、男と女の濡れ場を演目で知つていたお梅は帰途、女芸人の眼と耳や肌で直接感じる、菊若と嘉吉のその夜の睦事や絡みに想いをはせていた。

大方の内容を絵図に即して、菊若の読解力に頼り、金治のからくりの知恵を加味して読み解けたのは、五日目のことである。菊若の都合や興行の合間のこととて、実

質期間は二週間ほどの日数を要していた。

連日でなく、断続的な五日間ではあったが、高橋金治は「茶運人形」の図面に全精力を集中し、まるで枯れ掛かった木の根が水を吸い込むごとく理解していった。その取組と執念は、とても少年のものとは思えなかった。

寝食を忘れ、何かに憑かれたごとく、あるいは神が乗り移ったと思えるほど、正に「からくりの小鬼」に変身して没頭していた。

同時に桐生の母の庇護の下というよりは、禁断の女の肌を感じる至福の時ともいえる充実の五日間、高橋金治は豊満な菊若師匠の脂粉の傍で、過ごすことができたのである。

浄瑠璃の稽古に一緒に来て、その光景をみていたお梅をして始めて、師匠に対する尊敬の思いと異なる、菊若という熟れた一人の女に感じる嫉妬の念が湧いた。それは恋心というには未だ幼さの残る、難波で女の頭だけを打つ、兄に感じていた自慢に近い、お梅の金治に対する恋情であったのかもしれない。お梅は、金治に、阿波池田の家の八人兄妹の、七番目の兄のような親近感を抱いて慕っていく。

子を産んだことのない菊若自身も、小鬼になるうとして、金治少年の素晴らしい才能を目の当たりにした。嘉吉にべた惚れした若い時の自分に戻っていくのを意識した。それは、母性本能に近い感情であった。我知れず入れ込んで、子鬼の金治を一人前に育てたいという、自分の昔の疼く肌が甦るような気がしていた。

久し振りに江戸の女の血が騒ぐ、新鮮な五日間であった。こうした機会でもなければ、日頃舞台の大からくりのろくろや滑車を操作

する、住む世界の異なる少年金治と、菊若は触れ合ふことが出来なかったからである。

更に高橋金治は、自分の心を許せる将来の相棒、正確には弟子とも言える二歳年上で今迄何かと張り合ってきた少年、森平次郎を説得して協力させることにも成功していた。からくりの手柄を一人占めにせず以後、二人の少年は、互いの知識を共有しようと誓ったのである。

やがて小屋に帰ってから、金治と平次郎の二人の少年の、新しいからくりを生出す共同作業が始まるのである。

「平次郎兄さん！俺の想いをぜひ聞いてくれ。どつしても平次郎兄さんに頼みがある。」

一ヶ月後高橋金治は、兄弟子の森平次郎をさん付けでたて、そう呼びかけていた。

「からくりのことだろう。話してみよ。金治の構想を・・・必ず手伝うと約束したからには、俺でできることなら、何でもやるぜ。言ってみてくれ！」

「先ず、等身大の猫のはればてを、奈落から舞台中央にせり上げる。無論、舞台の右袖(上手)では、お梅が薄雲太夫の猫の外題を社中の中で語っている。左袖(下手)では、例の大きな水車が廻っている。舞台の灯り、三本の大きな水車を置く。左右の舞台端と中央だ。そうこれは昼間の興行でなく、夜の興行でなくてはダメだ!!」

「水車のろくろと、奈落から上げる猫のろくろの手を、一手に分けるのか?」「いいや分けないでやる。分けると手が足りなくなる。」

「どつやってやる?」

「平次郎兄さんも知ってのとおり、今大型水車は弾み車になっている。情性で回すためにもう少し大きくして、鉛を貼って重くする。」

「なるほど。上手い方便だ。一端水車を回しておいて、其処を離れて次に奈落のろくろと滑車で、猫のはればてを舞台上上げる方に移るといわけだな。」

「でも何故夜の興行なのだ?」

「お梅の宙乗りをやるためだ!!」

「宙乗り??、別の大からくりが要るぜ。」

「普通ならこの構想には、水車、奈落、宙乗りと二つの大からくりが必要になるが、それを二つの大からくりで・・・いや実際は一つの大からくりでやる!!でも宙乗りは危険だから、招き猫のからくりが客に飽きられたらやることにする。」

「・・・」

兄弟子の森平次郎には、高橋金治の構想を完全に理解し切れなかった。然も自分に対する依頼を聞いて益々、突飛とも思える金治の大からくりに思えたのである。

「俺に任せてくれ!!後で話す・・・兄さんへの頼みというのは、真鍮の板とそれを巻ける鍛冶を探して欲しい。」

「真鍮?猫のはればてを茶運人形のように動かすのか?」

「この場合、猫のからくりが動いても面白くも何ともない。別のことをさせる。」

「・・・」

座長にも相談せずに、高橋金治は一体何

をやらかそうとしているのか？

森平次郎は、大言壮語する金治に不気味なものすら感じ始めていた。それがやがて二歳年下の男をまるめて、異界の天粹(てんすい)を見る眼に変わっていくのである。本来天粹とは、氣狂がいのように夢中になり、異常に熱中する人という意の用語のだが、浅草界限では異端の天才のように、当時使われたのである。

日本において真鍮の名称が定着するのは、江戸中期以降と言われている。明和年間の老中田沼意次の時代に、真鍮座を設置し寛永通宝真鍮四文銭が鑄造された。庶民にお馴染な真鍮製品は、煙管の金具である。他に仏具、鏡、小柄・鉢、匙、分銅、香炉等の手工芸品が作られたようだ。

案の上、森平次郎には真鍮職人を浅草界限では探せなかった。その代わり二束三文で古物商に出ている、尾張で作られたと言われ、既に無用の長物と化した「和時計」を見つけてきた。部品に真鍮が使われているのを、古物商の親父から聞き込んできたからである。報告を聞いた高橋金治は、飛び上がった喜んだ。

「兄さん!!有難う。欲しかったのは真鍮のぜんまいと歯車だ。兄さんに大感謝だ。」

「.....」

「これで、猫のはれば、のからくりができるよ、作る時には兄さんにも手伝ってもらおう」

「俺も金治の役に立ててくれよ。新しいからくりのことで、俺のできることは何でもするぜ。」

森平次郎には、大喜びした訳すら判らなかつたが、これで金治の片腕になれるような気がしていた。高橋金治は、「機巧図彙」

の(鷹本海賊版)の首巻に、この和時計の解説があることを既に知っていた。然も、「茶運人形」が、和時計の技術の物真似であることさえ見当を付けていたようだ。

当時、この高橋金治少年の非凡な才能に氣付いた人間は、桐生の座繰りの親方の吉兵衛と、自在屋嘉吉の二人だけであった。

和時計は、自鳴警が正式名であった。尾張、現在の名古屋が明治維新まで、江戸、京都、長崎と並ぶ「和時計の数少ない産地」であることを高橋金治は、後に知るのである。それが証拠に、名古屋で代々名跡を継いだという、津田助座衛門を明治維新後に訪ねているからである。

江戸時代の時の表示は、日の出、日の入りを基準に六等分し「一時」と数える、不定時法であった。落語の「時そば」を思い出して戴きたい。夏冬の昼夜の長さの異なる時に対処するために、頭頂部に棒天符という独特の仕掛があつた。明治維新後、太陽暦の採用で、時計制度が定時法に改正されたことにより、和時計は無用の長物と化したのである。

宙を飛ぶ猫

四ヶ月後、自在屋嘉吉が菊若の家を訪ねていた。今考えている猫の出し物について、温めてきた構想を話し菊若の、いや佐奈江の忌憚のない意見を、聞きたかつたからである。

佐奈江は、こうした場合何時でも嘉吉に、齒に衣着せず的確な助言を与えてくれた。

「お前さん!今夜は泊まっていくだろう。ゆっくり湯屋にでも行ってきたらどうだ

い?少しは疲れをとつた方がよいよ。余り頑張り過ぎると身体に毒だよ。戻るまでに熱燗二、三本付けておくから.....」

「そうするか.....」

「悪い湯女に引つ掛るじゃないよ!」

女房の様な軽口を叩き、嘉吉を送り出すと、佐奈江は夕餉の支度に取り掛かつていた。当時、江戸市中には、方々に風呂屋があつて身体を洗ってくれる湯女が沢山いた。板の間だけ男と女に分かれていて、湯船は一緒、所謂入混湯(混浴の意)すらあつたのである。そうした湯船の場に出没、三助と混じり湯女が隠れて春を販(ひき)いたのである。

そうした湯女を取締る目的で、元々幕府煎りの新吉原が、明暦三年(一六五七年)浅草の日本堤に作られたという。元吉原は、今の日本橋人形町界限にあつた。以後、吉原と言えば、幕府が治安対策として支援した浅草の吉原のことをさすようになるのである。

「実はな、お佐奈!お前さんの意見をぜひ聞きたかつたのと、お梅と金治のことで相談もあつてやつて来たんだ。」

嘉吉は、湯屋から戻ると、「お佐奈!」と愛称で語り掛けながら、どつかりと腰を落着けて女の酌を受けた。

盃を遣り取りして二合ほどの酒を干し、酔いが回る前に、嘉吉はおもむろに、案をぶつけるように佐奈江に切り出していった。

新しい猫の出し物は、中々に練れた構想だつた。高橋金治草案のからくりの仕掛も、未だ完成には至らなかつたが実に凝っていた。先ず、娘義太夫の自在屋綾之助のお梅が、

薄雲太夫の猫の話を、舞台上手で語っている。下手に、自在屋名物の大型水車がゆっくりと廻っている。お梅の語りが佳境に入って木が入ると、中央の奈落から、お雛子と共に等身大の猫のはればてがせり上がってくる。

これから、金治の招き猫のからくりが始まる。眼の色が異なっていて金眼、銀眼と猫の両眼が夫々ピカリと光る。猫の右手が除々に持ち上がってくる。お梅が立ち上がって、猫に近寄り、右手に一つ一つ手毬を渡す。

新たな自在屋名物、開運の自在屋手毬だ。手毬の猫の縫い取りの色が夫々違っている。一番福は、金系の猫の模様、二番福は銀系の猫の模様、金系・銀系の手毬は数が少なく、猫の縫い取りのない手毬が大部分だ。口上と共に客に向って舞台の猫が手毬を投げていく。投げ終わると、猫が舞台の下に消える。

舞台のお梅を中心にして、社中の雛子で、派手な女の手踊りで締めくくる。時々、お披露目と称し、自在屋の半纏を着て座長と桐生の機巧師・金治一人が舞台上上がる。

更に、引き札(木版摺りのチラシ広告)をうつて、誰が金系銀系の手毬を拾ったかを掲載する。頻度は一ヶ月に一度位が良い。

嘉吉のその案で、正に阿波徳島の自在屋綾之助のお梅と、上州桐生の機巧師・高橋金治の二枚看板を、やっと育てた自負心からか、自在屋の目玉にする構想であった。

「そこで、次の自在屋の二人の花形芸人を育てるために、お佐奈! どうしてもお前の知恵と協力が欲しいのだ。お前も知つてのとおり、お梅と金治は、俺が手塩にかけてきた芸人だ。俺には子供が居ない

が、場合によっては、金治には自在屋の名跡を継がせても良いとおもっている」
類を染めた佐奈江が、盃を置き膝を詰めると嘉吉の顔を窺いながら唇を開いた。

「聞けば、今回の猫の出し物の案も素晴しいし、きつと当ると思うけど・・お前さんが二人の素質を見抜いて育ててきたからには、入れ込む気持ちは良く判るよ。今までのお前さんをみていれば、無理もないよ。でもこの際だから、肝心なことを言わせてもらおうよ。怒らないでくれ。」

「お佐奈の顔が怖いな!・・怒らないから、何時ものお前えの存念を言ってみな」
「座員の誰も、お前さんには逆らえないと思つから、素人意見を聞いておくれね。」

佐奈江は、まるで長年連れ添う嘉吉の世話女房の如くじつと見詰めて話し始めた。
お前さんは、世俗に疎いので知らないかもしれないがと前置きし、巷に「招き猫」で一儲けしようと思む輩がとみに増えたと言つた。

例えば当時、金眼・銀眼の猫が大変人気で縁起物の猫として珍重されていた。金と銀を共に運んで来ることは、水商売では願つてもない。

猫の人形でも、木彫人形から土人形、紙人形、右手を上げたり、左手を上げたり、中には、両手を挙げて笑つた猫まで出現する。猫の笑つた顔が、あの時の女の表情に似ているとかなんとかこじつけて・・だから雌猫や雄猫を区別して売り、色も白猫があつたかと思つと、黒猫がいる。

何時の世でも如何わしい商はあるもので、蛤の貝の蓋に軟膏を入れ、勃起を促す塗り薬

として当時、猫悦膏とか、喜悦膏として売られていた。物真似の果てに、招き猫を沢山収集しては、土人形の底の空洞を、得体の知れぬ淫靡薬の隠し場所として利用し・・これなら安心して、子供の面前で、公然と神棚や仏壇に並べて飾つて置ける等と戯言を述べ・・またたびの粉、蝮の粉、守宮の粉を調合、男女別の効能をうたい、男猫悦丸や女猫喜丸等に仕立てて催淫剤と称して、町家の女房や小女、後家、果ては尼僧にまで売りまくる者。

現に菊若の所に浄瑠璃を習いにくる絵師がいて、その男は様々な猫の姿態の絵を売つている。猫のからみを入人間のあの時の姿態に見立てて、猫十、一五の十の猫の煽情姿態を描き、枕絵や笑絵として売捌いている。その枕絵を挟み込んだ黄表紙を商う者。

湯屋の洗い場の落ち口に溜まる、女の陰毛を集める商売がある。これを肌身に付けていると博打に勝つという験担ぎを真似てか、長寿の猫の毛を集め、寿命寺や延命寺という名の門前で勝手に売りさばく抜け目ない者。

ご利益があり、願いが叶うお猫様の人形を、金欄緞子、緋縮緬、天鷲絨の蒲団に乗せて飾る者。それも二枚重ね、三枚重ね、誰が始めたのか、願が叶う度にまた一つお猫様を買い増す奇妙な風潮が現われる。

贗物のお猫様防止に・・猫の尻の部分の円の中に×の刻印を打ち、丸×即ち全占の意を通わせたりする者が出現するといふ按配。

「お前さんは、こつした巷の意味の無いお猫様の風潮に便乗しようとしているだけだよ。お前さんの本分はからくりではな

いのかえ？わたしが惚れた嘉吉さんの本文は、決して猫では無かったはずだよ。からくりの、いや自在屋嘉吉の筋を、これからもキッチリつけて欲しいよー」

佐奈江は、一気に早口で捲し立てると、少し言い過ぎたと思つてか、嘉吉の視線を避けるように眼を伏して、手酌で酒を注ぎ盃をぐいと煽った。その仕草が何とも色っぽい。

これだけ、言外に猫の出し物を否定されると、嘉吉は流石に怒りが込み上げた。でも約束どおり、お佐奈の言葉を聞いてじつと耐えて怒らなかつた。嘉吉の約束だったからと言つより、苦言を素直に語つたお佐奈に寧ろ、眼から鱗が落ちる思いで内心惚れ直していた。

「流石深川育ち、俺の惚れたお佐奈だ!!」

「……」

「判つたぜ、お佐奈！もうそれ以上言つた。実はもう一つお佐奈に頼みたかつたことがある。お梅と金治のことだ。」

「ごめんよ！かつてなこと言つて……」
佐奈江は、嘉吉の苛立ちが表情からはつきりと見て取れたが、甘えるように嘉吉の胸にしな垂れ掛かり身を埋めて仰ぎみた。

「いやいいんだ。それがお佐奈の持ち味だ。一番今心配なのは金治のことだ。あいつは未だに女を知らない。お前も感じたように正に『からくり馬鹿』そのものだ。今筆おろしをさせなければ、一人前の芸人になれない。お梅もそつだ。あのままでは娘義太夫として蓄のままで。語りに男を蕩かすような色気が足りない。役者との浮いた話の一つや二つも無いなら、

回りをつくつてやらないと人気がでない。」
嘉吉は、しな垂れ掛かつたお佐奈の身体を抱き、身八つ口から手を入れ乳房を弄っていた。

こうされると、非縮緬の襦袢の下のお佐奈の肌は何時も火照つた。股間の疼く足音が自分でも次第に聞えてくるのが判つた。

「お梅ちゃんの色気と、金治さんの筆おろしは……兎に角わたしに任せて……ダメ！ダメだよう……お前さん……そんなことしちゃうー」

二人でしつぱりと、濃密なお祭りの長い夜を過ごす前哨戦が始まつたのである。

「ダメじゃあない!!……金治もこうして女の柔肌を知りや……からくり師として……もつと滑らかに……捏ねて回せるようになる……これか!!……お梅だつて……もつと善がり声で義太夫を語れるだろう……これで……どうだ感じるか、お佐奈!!」

「……」
感度の良いお佐奈の妖艶な身体が、一瞬身悶えたが、辛うじて声を発するのに耐えていた。自分の意思に反し、嘉吉の久し振りの指の動きで、しとどに濡れて感応した。未だ話の決着さえ着いていないのに……

臍なる身裡の何処かに、嘉吉の手管に抗する理性の焰が、燃えていたのかもしれない。押し開く嘉吉の指が、容赦なくお佐奈の恥部を攻めてくる。紫の腰の扱き帯びが解けそうになる。閉じられた赤い腰巻に包まれた大腿を、拡げまいと懸命に耐えるお佐奈の眉間に

何時の間にか快樂の皺けだくが刻まれていた。
嘉吉は、片方の手でお佐奈の頰おとぎをぐいと手

元に引寄せてから、もつ片方の手を腰に回し、裾を割つて身体を預けるように重ねていった。
自在屋嘉吉は、自分の猫の出し物をけなされた腹いせを、今夜もお佐奈の身体を借りて、猫が獲物の鼠をいたぶる翻弄するように苛め抜いてやるつもりだと思ひ始めていた。

自在屋嘉吉は、部屋にお梅と金治を呼んで新しい猫の出し物の進行状況を聞いた。

お梅の方は、菊若の指導で順調のよつだつた。男の味を知る前に、女同士楽しみ方を教えてやるのだと菊若は言つて、辰巳芸者の母から教えられた秘儀ほくといちはいちを、浄瑠璃の稽古の後にお梅には施ほくしていたよつだ。

秘儀とは、遊女や芸者の技能伝授のため、あるいは客を取れない場合の互いの慰みとして行う性戯、ある種同性愛のことである。江戸大奥の女中の間でも当時盛んに行なわれていた。

そのためか、初めての月のさわりがお梅に訪れた。菊若は、座長の嘉吉に知らせて、手踊の女座員全員で、お梅を祝つてやるよう知恵を付けていた。美形のお梅の娘義太夫にめつきり艶がでてきた。髪にさした簪を揺すり、床本を置いた見台けんたいに身を乗り出して、恍惚の表情で顔をしかめて語る、お梅(自在屋綾之助)の動作に、九歳や十歳の女の子とも思えぬ、なんとも言えぬ色気が滲み出るよつになつたからだ。

座長に褒められる、お梅はとても嬉しくなつて、隣にいる金治にも誇らしい気持ちになつていた。問題は浮かない顔の金治の方であつた。

「良いから、どうせ全部は出来てないと思つが……金治の案を一通り聞かせてみる!」

「最後は、猫の宙乗りをやります!!お梅の宙乗りと考えたのですが、少し危険なので案を変えて、猫の人形を宙に飛ばします。」

「猫の宙乗り?」

「金治さんのためなら、何でもやります。」

お梅は必死で、苦境の金治を助けようと健気であった。好きな金治のからくりなれば、お梅はどんな危険をも冒せる気がしていた。

座長は、そんなお梅を制して金治の言葉を待った。お梅(自在屋綾之助)が、猫の手毬投げを終えて、元の上見台に戻って座ると直ぐに、お梅を奈落へ降ろす。と同時に猫の人形と入れ替へて、舞台の見台に猫が座る。そのまま真っ直ぐ宙に猫が浮いていく。舞台の上まで行くと今度は水平に移動する。恰も猫が宙を舞っているように客には見える。舞台下の水車の位置まで宙を猫が飛ぶ。

そのからくりの中味まで、座長の嘉吉は敢えて聞かなかった。恐らく金治はその手前で悩んでいるに違いないと、にらんでいたからである。でも高橋金治の最終的な構想が、初めて座長とお梅に明かされたのである。

五ヶ月経過して高橋金治は焦っていた。

座長から言い渡された約束の期限に、後一ヶ月もなかったからだ。幸い、手先の器用な兄弟子の森平次郎の協力を得て、白猫のはりぼてもできたし、奈落から猫のはりぼてを、舞台上上げる大からくりの操作も上手くいっていた。

金眼・銀眼の眼の動きも完成していた。

眼の動きは、舞台下から糸で操作できた。眼には金銀の紙が夫々貼ってあったから、大燭台の蠟燭の灯でピカリと光り、金眼・銀眼に観客

から観える。森平次郎自慢の出来栄である。

肝心の猫が右手を上上げる動作は、高橋金治苦心のからくりであった。

和時計から取り外した真鍮のぜんまいと歯車がそっくり役に立った。ぜんまいを巻いてから、逆に戻るのを防止する留輪と爪歯(ラチェット機構)は、そのまま時計の部品をそっくり利用した。ぜんまいの戻る力を、猫の右手を上げる力に変換するのに工夫を要した。行戻輪に取付けたカムとスツパーの動きで何とかゆっくり動いた。始めは、動きがぎこちなかったが、協力者の森平次郎の助言で、猫の右腕を竹ひご和紙で軽くしてから動作が実に滑らかになった。

もっと肝心な動きは、右手に手毬を載せて客席に飛ばすからくりであった。これが出来ないで金治は焦っていたのである。

見たことはないがどうやら、絵図から判断して、「茶運人形」の場合、歩く動きに連動して頭を振りながら歩いている。この動きを糸でやっているが、糸では駄目だ。頭を振るからくりの動作の応用を、大きくして勢いを付ければ出来るはずだ。

金治の頭の中では既に判っていた。

右手を上げる操作の次に、輪に取り付けたクランクで勢いよく振らせるようにすれば良いと。留輪と爪歯を工夫して、発条の力を一挙に解放すれば良いと。然も一回だけでは駄目だ。連続して数回右手を振り上げて放つ操作をさせねばならない。どうしても真鍮の発条も弱く数が足りない。座長の嘉吉は、俺ならそんな時は、吉原に

行って舐めてくると、言いたかったのだが、金治にはそれも言えなかった。連日奮闘している高橋金治に向って助言をした。

「金治なあーそういう時こそ、息抜きが必要なんだ。小屋の現場で幾ら思索しても知恵は浮ばないものなんだ。そういう時には、外の空気に触れることだ。一番良いのは、女を知ることだ!」

「.....」

「まあ今日のところは、浅草界隈を一回りして、もう一度、菊若師匠の家にも行き、夕飯でもご馳走になり、おっぱいでもしゃぶらせてもらってこい!」

高橋金治は一人でぶらりと、「機巧図彙」の贋本(海賊版)を持って、夕方の浅草の街に飛出していった。最初は、ぶらりと界隈を廻って戻る積りだった。抗し難い心の誘惑で、自然と菊若の家近くに足が向っていた。

それは、座長の言葉に触発されたのか、五歳の金治が桐生の母の懐に抱かれ乳房を弄る時の、ぬくぬくとした温かい幼い郷愁への錯覚であったのかもしれない。

菊若師匠は、まるで高橋金治が来るのを予感して待っていたかのように歓待した。

「どう、金治さん、からくりの方は進んでいるのかえ?金治さんは何たって座長の一番弟子だから何時でも歓迎だよ!」

「それが、最後の難問が解けなくて...」

「そう...そいじゃ今日は、息抜きにゆっくりしてらっしゃい。よかつたら夕飯ごちそうするわよ。」

何時近寄ったのか、菊若の眼が思い掛けな

い近さにあった。女の鬢付け油の匂いと脂粉が傍にあった。ゆっくりと瞬きもせず金治の顔を黒目の大きな女の眼が見据えていた。

金治は慌てて、この文章の意味が判らな

いと指差して、熟れた女の眼に対抗した。

その文章は「機巧図彙」上巻の序文である。

菊若がたどたどしく、文字を指でなぞりながら、金治の顔に自分の頬を寄せるようにして読み解いてくれた。

上巻 序文

「夫奇器を製するの要は、多く見て心に記憶し、物に触て機転を用ふるを尊ぶ。譬ば魚の水中に尾を揺かすを見て舵を作り、翅を以て左右する見て櫓を製するの類是なり。されば諸葛孔明は妻の作れる偶人を見て木牛流馬を作意し、竹田近江は小児の砂弄を見て機関の極意を發明す。此書の如き実に見戯に等しけれども、見る人の斟酌に依ては起見生心の一助と成なんかし」

特に締めくくりの箇所 この本に記載の内容は子供の遊びのようであるかもしれないが、見る人の心構え次第で、起見生心＝新しい發明・発見の助けとなることになる。と菊若の妖しい解説と激励を、金治はつわの空で聞いていた。今日は、何時もの浄瑠璃の稽古に来ていたお梅が居ないのが特に不安だった。

その日、菊若は夕飯を食べさせてくれた。かいがいしく母のように飯と味噌汁と香の物の膳の支度をしてくれた。夕飯を馳走になつて菊若の家を辞して帰ろうと思つた。桐生の

子供時代のように厨に食器を運ぶと、一体何にしに来たのだと菊若が怒つた。

「男はそんなことしなくていいのー」

「……」

「金治さん、掌をだしてご覧。からくりが上手くいくかどうか、手相をみてあげるよ」

そういつて引き止められた高橋金治は、これから起るであろう菊若の誘惑の行動が、本能的に予想できていた。俎板の鯉の心境で度胸を決めた。女の指が金治の掌に軽く触れ、更に顔を寄せてくると、ゆっくりと唇を寄せて、御呪いをするように、掌に息を吹きかけた。焚き込めた着物の香が匂つていた。

「大丈夫、からくりはきつと上手くいくよ。」

女は金治の握つた手を、腰巻の下の股間に誘導した。女の大腿の上を、掌が滑っていくのが判つた。金治の物が、次第に大きくなるのが恥ずかしかつた。女は眼を瞑ると、更に秘部に誘つていった。禪の下の棹がさらに硬くなつた。物がいつのまにかすわりと剥き出しにされた。女は着物の裾を割つて、金治の物を自分の濡れた股間にあてがつた。

「いいかい！おなごはこうして濡れてくるのだよ。さー遠慮しないで入つておいで……」

金治は、最初挿入しないまま果てた。

女は、今度は蒲団を敷いて、緋縮緬の肌襦袢一枚になると金治を蒲団に誘つた。

前回同様、金治の手が女の手によって股間に誘導された。女の乳を肌襦袢の上から、そつと撫でるよう要求した。金治の若い一物が甦つていた。立上る股間の一物は、生き物のようだった。このままだと、勃起した生き物が彷彿

と、何処に行くのか判らない。額の汗が女の肌張り付いていくよつた。

女は固く甦つた肉棒を、再び股間の肉襷で迎え入れた。今度は交合が上手くいった。でも、腰を数度動かしただけでやはり果てていた。

「今夜は泊まつておいきよ、金ちゃん……大丈夫……座長公認だよ。朝になったらまたしゃんとしてくるから」

菊若はそう言つと、金治の再度の挑戦を促して

いた。二人はぐつすり熟睡した。

前日の初体験の金治のそれは、二度ともあつけなく終わったが、明朝もう一度励まされて挑戦した金治の物は、見事に復活し、三回目にしてやっと菊若の秘壺に誘導され収まり、一人前の男に成れたのである。結局こうして、菊若は座長嘉吉との約束を果し、金治の筆おろしを手伝つてくれたのである。

こうして、金治は初めて菊若の女陰を借りて、女に気をやり、精を三回放出する快感を覚えたのである。後に急速に萎えていく、活きた男の物の挙動が不思議でもあり、またそれは奇妙な自分のからくり人生そのもののように思えた。ふと、白い猫が手毬を見事に投げる光景が浮び、宙を飛んでいる猫のからくりが観えた。

同時に菊若の優しい母のような心使いに感謝し、女の肉体と心の不思議さを思つていた。

桐生からくり異聞

異聞とは、人が余り知らない話、普通いわれる内容と異なる珍しい話のことである。これからの話は、浅草と桐生の間を橋渡した天粹の存在、まさに稀有な人形のからくり史の空白

部分を埋めて桐生からくりの発祥経緯を、その後の機巧師・高橋金治を通じて語るものである。他人の一言が、その人の人生を変えることがある。お梅の場合が正にそつであつた。

あの日、兄弟子の森平次郎の一言が無かつたなら、お梅はあれ程までに悩まなかつたかもしれないし、上州桐生にまで金治にくつ付いて行く羽目とならなかつたかもしれない。

「金治は、今朝は朝帰りだつたぜ！」

感の鋭いお梅には、その平次郎の一言で充分だつた。金治さんは、銭も無いから決して吉原何ぞに行かないはずだ。もし、外泊したとしたならあの女の所しかない。それは一緒に「茶運人形」の絵解きをしていた時に感じた、熟れた女の手管に翻弄されようとしている金治の身を想うお梅の哀れな恋情であり確信であつた。

恋の瞬間が、突然少女を女に変身させる。

その後の、自在屋綾之助のお梅が語る娘義太夫は、想いの丈をぶつけ見台に身を乗り出すようにして、声を振り絞り、頭の簪を落す程の熱演に変わった。まるで恋に狂つた「曾根崎心中」の遊女・お初や「松竹梅雪曙(八百屋お七)」のお七が、舞台の其処にいるかのような迫真の語りであつた。同僚の少女達も、お梅の語る様を訝しがつた。

ところが、自在屋綾之助を名乗るお梅の娘義太夫が人化化した。座長嘉吉との口約束の六ヶ月過ぎても、からくりは未完であつた。

金治の顔は依然として冴えなかつた。

自在屋としての出し物は、金治のからくりが、完成の域に達するまでついに待てず、座長嘉吉は、夜だけの見切り興行に入らざるを得なかつた。それでも従来の自在機と手踊り

だけの興行と異なり、新しい出し物は、目新しさも手伝つてか滑り出しは上々であつた。舞台中央で、奈落からおもむろにせり揚がつてくる金眼・銀眼の猫のからくりと、自在屋綾之助の語る薄雲太夫の逸話の娘義太夫だけでも、自在屋の面目をほどこし、浅草界隈の評判をとつていたからである。

一人有頂天になつていたのは、兄弟子の森平次郎であつた。猫の眼が夫々大燭台の灯に金と銀に光る度に、さらに猫の右手がゆつくり上がる。馴染みの招き猫の格好をとる度に、客席は湧きやんやの喝采となつた。

あの夜菊若の家で、高橋金治が筆おろしで精をやつた後にふと垣間観えた、白い猫の手毬を見事に投げる光景や宙を飛んでいる猫の姿は、そこには無かつたのである。小屋に戻つてみると、出来たはずのからくりは、するりと金治の手から逃げる唯の幻影であつたからである。

そんな金治の姿をみて、座長の嘉吉の口から容赦ない罵声が飛んだ。もはや、菊若の所で夕飯食べて来い等と言も言わなかつた。「どつした金治、目玉が腐つていゝぞ!!」からくりの小鬼が聞いてあきれ、そんな言葉は・・・金治にや十年早い!!」

「猫の宙乗りから先にやらせて下さい。どうしても、手毬を投げるからくりができませんのです。俺を殴つて教えて下さい」

「馬鹿野郎!! 手前でかんがえろい!!」

座長の嘉吉は、金治の気性を読んでいた。

嘉吉は、金治のからくりが既に自分の技を全

て盗んで、既に越えているのを知っていた。

金治にしてみれば、それは中途半端な、猫のからくりで、自分を満足させられないものであつ

たのであろうが、「茶運人形」の機構を盗み、猫の右手を耳の位置まであげた技は、嘉吉のからくりの域を完全に超えていたのである。

何故なら、嘉吉のからくりの技は、舞台の大からくりを創り出した、一時代前のものに過ぎなかつたからである。でも、座長の嘉吉は、微塵も態度に表さずに、ここでは冷たく突き放すのが金治の為になると思い、その後も敢えて罵声を浴びせ続けたのである。

一方、自在屋綾之助の語る見台の傍で、簪を偶然拾つた男のお客は、記念の簪を返さずに、思わず家に持ち帰つていきたくなるほどで、絶妙な色気あるお梅の語り、皆惹かれていたようである。娘義太夫が、新たな「自在屋」名物に変わつていたようである。

高橋金治は、美形の澤田お梅の巷の人気を聞く度に、自分が落ち込んで行くのが判つた。誰の慰めの言葉も金治には無駄であつた。

黒い暗幕を背景にして、自在屋綾之助の何時もの見台が上手にあつた。その座位置の真下に新たな奈落が切られていた。奈落から舞台天井に向つて、真っ黒に塗られた長い綱が一本伸びていた。その綱は天井の一角に設けられた、黒塗りの滑車を経て、直角に曲がると大水車の方向に更に伸びていた。最後は、別の滑車を経て下に垂れ下がり、舞台下手の大水車に付けられた誘導輪とからんでいた。つまり、水車が廻る動きに曳かれて、黒い綱が動くような機構になつていたのである。然も、水車の動きと綱の動きは、独立に操作されて動く遊輪仕掛となつていた。更に大水車は、少年の人力によって廻されていた。

水車の上には、何時ものように水が注がれていたから、まさか綱の動きと水車が連動して動いていようとは、金治を手伝った者以外の人間の誰も、座員の者ですらこれに気付くものは少なかったのである。まして、舞台上の大燭台の淡い灯りの下では、背景の黒い暗幕の前を綱が動いていくのは、客席の何処からも誰からも見えなかったのである。

綱と滑車と一つのろくろをつかった、金治のからくりをみた座長の嘉吉は、その技の素晴らしさを一目みて、はたと手をつって合点した。猫の宙乗りの金治の大からくりの技が、既に完成しているのをこうして了解したのである。

「金治!!猫の手毬投げは後でいい。明日の夜直ぐに猫の宙乗りの出し物をやるぞ!!」座長自在屋嘉吉の言つ、自在の魂を貫いた、自由奔放な似非なんかでなく、正にそれこそ真正正銘の斬新なからくりであった。

菊若のいった言葉が、胸に甦ってきた。お前さんは、こうした巷の意味の無いお猫様の風潮に便乗しようとしているだけだよ。お前さんの本分はからくりではないのかえ?わたしが惚れた嘉吉さんの本文は、決して猫では無かったはずだよ。からくりの、いや自在屋嘉吉の筋を、これからキツチリつけて欲しいよー

その夜、猫のからくり興行は圧巻だった。菊若が猫に便乗と貶した演目ではあったが、それは今迄のからくりを越える、浅草の何処にも無い画期的で斬新な大からくりの出し物が、完成した記念すべき夜だったからである。自在屋嘉吉が、お佐奈に対して、いや浅草界隈の客に対しても筋を通した夜となった。

同時に、高橋金治と言つ浅草の一天粹から、桐生の機巧師誕生の夜だったからである。

その夜、自在屋綾之助が、薄雲大夫の猫の外題のさわりの部分を語り終えた途端、お客は上手見台の前に忽然と現われて座っている大猫を見た。素早くお梅を奈落に下ろし、準備の大猫の人形と入替えたのであるが、客席からはお梅があたかも大猫に突然、変身したように見えたのである。もちろん、この大猫は客席からは見えない黒い綱にしつかりと固定されていた。

突然ふわりと大猫が宙に舞った。後は、舞台の天井から客を見下ろすように、ゆっくりと足さえ動かしながら、舞台中央の招き猫の上空を闊歩し、別の大猫が揺れながら宙を飛び、舞い遊んでいたのである。

まるで猫に羽根が生えているようであった。下手大水車の上までくると、役者が花道で見得を切るように、足を踏ん張って、首をぐるりと回したのである。啞然とした客は皆、度肝を抜かれたように、口をあぐりと開けて、暫し喝采するのも忘れていた。

奈落に下ろされたお梅は、客の反応をじつと心配して聞いていた。暫く後に万来の拍手と喝采の声を察知すると、舞台下にいた金治のもとに駆け寄り、その手をとってその胸に飛び込みしな垂れ掛かっていた。手踊りの準備で舞台下に待機していた同僚の少女達は皆、お梅が座長の罵声に耐える金治のことで、どれ程心を痛めていたかを良く知っていた。

金治も、お梅の簪の揺れる頭を、思わず兄妹のように抱きかかえていた。奈落でろくろを回していた少年達は、二人が抱き合つのを極く当然のごとく扱ったのみならず、座員の誰もがそ

の夜の興行に賞賛の言葉を惜しまなかった。その夜は、正にお梅にとっても金治にとっても、自在屋の芸人に成って以来、一番晴れがましい嬉しい夜となったのである。

初の興行では、全く口上無しであった。後に、猫の数も一匹から二匹になり、親子猫になりして変化が生じ、軽妙な口上が付け加わったことで、自在屋の猫からくりの評判は、嫌が上にも高まったことは言うまでもない。流暢な口上と共に、舞台では社中の雛子で、派手な少女の手踊りで締めくくられ、楽日のお披露目では、自在屋の半纏を着た座長と桐生の機巧師・高橋金治、浄瑠璃のお梅、自在屋綾之助の三人が舞台上上がる事も行なわれた。以後の語り草として、自在屋綾之助の名入り簪を拾つ客が、続出したとも伝えられている。

高橋金治と平次郎の共同制作の、舞台中央の招き猫のはればての右手が、それまでの単純な動きから、更に複雑なからくり動作を加えたのは、何と明治五年(一八七二年)十二月三日以降のことだといわれている。

その日は、明治政府が、不定時法から定時法、太陽暦を採用した記念の日である。その日以後、大名や豪商の子孫が保存してきた和時計を大量に処分放出し、古物商の店先に一斉に出回るようになった頃と一致するのである。もっと正確に言つたら、名古屋藩で代々名跡を継いだといわれる、御時計師・鍛冶職頭の津田助座衛門を、翌年の明治六年の春に高橋金治が訪ねて以後のことである。

最初の猫のはりぼての単純な動きは、古物商の壊れた和時計を分解し、取り出した発条と歯

車のいわば廃物利用であった。今度の右手で物を投げる猫のからくりは、鍛冶職を兼ねていた津田家に、大型の真鍮製の発条や歯車、他部品を注文し制作して貰い、それを新たに自在屋の機巧師・高橋金治が組込んだからである。

余談であるが、「からくり人形の文化誌」(高梨生馬著 学芸書林)によれば、元々名古屋藩での津田家の仕事は、藩の注文に応じて時計を製作する一方で、藩内の鍛冶屋の面倒を全てみていたので、真鍮鍛冶の手で発条や歯車を制作させることが可能だったという。幕末に不定時法で時計を計っていた時代は、藩主の部屋、場内の大広間、太鼓櫓は元より、藩校や出先役所の全時計の調整管理をしていたようだ。日の出、日の入りを基準にした不定時法に必要だった、二挺棒(天符)の調整仕事は、結構津田家の大変な仕事であったが、先の定時法の變更で、その必要が無くなっていったのである。

今迄の単純な動作、即ちからくりによって耳まで持ち上がる右腕の簡単な動作だけでなく、格段に進歩を遂げ、手で掴んでいた物を、向きを変えて投げ分ける複雑な動作まで、滑らかに出来るようになったからである。

こうして和時計の技は、桐生の機巧師・高橋金治の技に継承され生かされた。それまでの木製部品で動く和製ロボット、金治が菊若の家で図録で学んだ「茶運人形」との動きとも異なり、金属部品の西洋のオートマター(自動オルゴール人形)にも匹敵する、本邦初の自動人形師の誕生となったのである。

次にここで、座長の嘉吉が、当初自在屋名物にしようと、開運の猫の縫い取りをした手毬の代わりに、猫の右手から何を投げさせた

かについても一言触れておかねばならない。

嘉吉が着目したのは、達磨の縫い取りをした赤い手毬であった。赤色には「おめでたい」という意味があり、「魔除けの力」、「病氣平癒の力」があると信じられ、特に疱瘡神は赤色を意味嫌うということで、後期には招き猫以上に「疱瘡除け達磨」が流行っていた。

江戸時代の死因の第一位は疱瘡であり、自然治癒を待つだけで有効な方法のない当時、「赤物」と呼ばれる疱瘡除けの人形や玩具が盛んに売られたのである。浅草に田原町に練物人形が存在し、疱瘡除けのお守りのみならず江戸土産として使われている点に、座長の嘉吉は着目したのであった。

地方から、自在屋の興行(芝居)からくりを観にきた客達もまた、拳(こぶ)って客席に投げ込まれた赤い手毬を土産にしたという。

自在屋の機巧師・高橋金治が、その後木偶頭、浄瑠璃人形文楽の頭まで彫るようになってきたのは、実は理由があった。金治が没頭して打った木偶を、実の兄以上に金治を慕っていた、お梅が喜んだのは言つてもない。

金治が心の裡で、生涯の伴侶として、認めてくれた証拠、自分をお嫁様に貰ってくれる前兆だとお梅は思い込もうとしていた。

難波で女の頭を打っていたお梅の兄が、江戸の浄瑠璃芝居見学を兼ねて、自在屋にも立寄ったからである。もちろん人伝に、自在屋綾之助の評判を聞き付けていたのであるが・・。

その時の兄と金治の会話である。
「おおきに・・お前様が、桐生のからくり師、金治さんかえり?評判が聞えています

がなーわいも今日始めて猫の宙乗りみさせてもらいました・・凄いい仕掛ておますな・・難波ではようみられませんがな」
上方弁で、兄は抜け目なく持ち上げた。
「お褒めくだり・・有難うさんどす」

「難波の人形芝居でも、あの芸は使えまっしゃると、わいは思います・・一寸ばかり頭打ちの身で気付いたことがおますので、あんさんと逢ってから難波に戻ろうとおもいました・・」

「あんさんは、からくりを幾つかから始めなすった?わいは、今の親方については、七歳でおました」

「あつしも、九歳の餓鬼時分からですが・・最初ろくろと滑車の人足で、舞台の大からくりでしたから・・今の人形からくりではなかったのです。親方が厳しい人で何時も怒鳴られ殴られてました」

「それは良かったでんな!わいの親方は口数の少ない堅苦しいお人で、女の頭ばかり打つ人でおました」

「あつしの親方とえらい違つたんですな」
「そうでおます。頭を二つ三つ作つても褒めも、貶しもせん親方でおました。まあそれは張り合いのないこつてでしてー」

「内の親方は、江戸っ子ですから、気風の良い・・拳固も喰らいましたが、その代わり随分可愛がつてくれやした。わっしやは目を掛けてもらったと感謝しておりやす」

「上方人と、江戸のお人の違いでしやるね」
「でも芸の道は、江戸も上方も無いの違いまっか?わいと、おまさんでは人形の頭とからくりと異なりませうけんどうが・・」

「確かに、そ・そりや違いますでしょう」
 「物の教え方からして、違うようですね。」
 でも内の親方は、口でいう代わりに自分で打った頭をよう見せてくれもつした」

「現物、現場 現物、現場、それはからくりの親方の場合も同じでやあした」

「能の面は、顔を上げ下げすることで、照ったり曇ったりさせますが、人形の頭は、舞台で立つの立たぬと申しまして・・・浄瑠璃の文句に合せてつかうのではのーて・・・目の動きと首の振り、始から作る時に性根と年齢を刻み別けるのでおます」

「難しそうですねー」

「わっしやーあまえさまのからくり人形を見させてもらって、この人は几帳面に動くからくり人形よりも、浄瑠璃人形の頭をつくるお人と睨みました。すれば、妹のお梅とも共演できるかなーとなれば兄として嬉しく期待したんでおます。どうぞお梅のこと宜しくお願ひもつします」
 お梅に出し物の参考にといい、小さなお守りのよつな、男女二体の木偶頭を置いていたのは、本当はむしろ金治に見本の頭を示して行ったように思えたからである。

やがて、桐生の元座繰りの親方の吉兵衛が、自在屋を訪ねて来たのは、高橋金治二十二歳、澤田お梅十六歳の時である。その時吉兵衛が、桐生織物業界の撚糸や力織機の開発に力を注いでいた時期である。

撚糸、染め、刺繍、縫製に関する独自の技術開発と、西陣の織物技術の導入で、既に上州桐生の高級絹織物の生産が軌道に乗り始めていた。もは

や、桐生は西陣に負けない絹織物産地として、全国的にも立派に定着し始めていた頃である。

桐生は優れた技術者を必要としていた。

後に、桐生に戻った高橋金治の協力で、吉兵衛は、水力で動く画期的な糸を撚って生産する技術、八丁撚糸機械開発に成功するのである。この切っ掛けは、実に吉兵衛が、九歳の金治を連れ、浅草に来た時から始まっていたといふべきであろうか。

吉兵衛の自在屋来訪は、桐生生まれの高橋金治の身にも変化をもたらしていた。

自在屋嘉吉は、桐生の吉兵衛が、自在屋に来た理由は、単に金治のからくり芝居を見に来たわけでは決まらずと見当をつけていた。金治の力量は、既に自分を越えていたのを、先の猫の宙乗りで嘉吉は嫌というほど、思い知らされていたからである。その事実は、嘉吉に言い知れぬ寂しさをもたらしていた。

時代が確実に変わっていく予感である。

明治初期、中期に掛けて、江戸三座と言われた芝居小屋が相次いで移転した。江戸の大風俗娯楽センターが消滅し、猿蓑時代の芝居は三十年で軒並み終わりを告げたのである。最後まで、高橋金治の優れたからくり芝居で支えて頑張ってきたが、さしもの自在屋嘉吉の覇気が衰える時がきていたのである。

最近富に弱気になった嘉吉には、何時かこの日がくるのが予感できた。それは桐生の実力者の吉兵衛が金治のからくりの力量を買って、江戸から桐生に連れ戻しに来た不吉な前兆と思えた。それはやがて自在屋そのものがしり貧になつて行く懼れに繋がっていたからだ。

その時が、意外に早く訪れてきたのがとて

も怖い位であった。早く、二代目自在屋嘉吉の名跡を金治に譲らなければ、この先自在屋の存続も危ういとさえ考えていた。

嘉吉は、例の如くお佐奈に相談していた。

「金治さんに、お梅ちゃんを抱かせてやりなさいよ。お前さんも覚えあるだろよ。」

お梅ちゃんはもう女の身体をしているよ。秘儀(といちはいち)で確認済みだよ。それに金治さんを好いておるはずよ・・・若い身体は若い身体で繋ぎ止めるのよ」

金治が、菊若の手引きで、お梅と本所深川の出会い茶屋で逢引したのは、吉兵衛が自在屋に現われて間も無くのことであった。

部屋は、階段を上がって奥まった、小奇麗な四畳半であった。こうして二人が顔を合せてのは、とても久し振りで、菊若の家で「茶運人形」の絵解きをして以来のことだった。

二人だけになると、随分ときこちない気分になった。行灯の光りのなかで、娘義太夫を語るお梅とは別人の少女がいた。

触れれば、金治の直ぐ傍に、阿波生まれの天粋の少女の肢体があった。見詰めて抱き寄せると、お梅は直ぐ金治の胸元に崩れてきた。

金治は、菊若とあの日のことを思い出していた。お梅も、金治が何を考えているか少女の感で察知していた。あの熟れた菊若の妖しい肉と自分の薄い肉を比べられるのが悔しかった。金治が、あの豊満な肢体に惑わされたかと思つと、悔しかった。自分も早く菊若のよう柔らかく男を惑わす肢体を得たかった。何としても金治を自分の方に向けておきたいと切なく欲つした。

「枕行灯を消してちょうだい！」

「お梅の顔をこのままみていたい！」
お梅が、仕方なく行灯の灯を吹き消した。暗闇に慣れると、枕を並べて仰向けに寝ている互いの顔の位置も、身体の方向も直ぐにわかった。片方の手で、怯える仔猫を慰めるように、お梅の肩を金治は抱いた。肩から優しく手を下ろして、お梅のこりこりした蕾のような乳を揉みしだいてやった。

最初、若い金治とお梅は一本の蔦のように絡まりながら、くすぐつたいと笑い惚けて、ふざけ合っていた。暗闇のなかで、身体をずらして、金治は自分の肉棒をお梅に握らせていた。お梅は、恥かしがってなお笑い転げていた。

本当は、若い二人の好奇心は、交わりを知るだけだとしても治まりそうになかった。お梅の肩からすべりおちる肌襦袢、桃色の腰巻が解けて足元に寄せられていた。お梅の顔が何時もより白く、金治の顔の近くに寄せられてくる。

二人は、互いの顔を意識して、ニッコリと微笑んだ。それを合図に仰向けになったお梅の大腿に金治は手をのばした。股間は少女の匂いを仄かにさせていた。

お梅は痛さに堪えて、金治の一物を自分の秘部に導こうとした。お梅の肉襷の奥にどくどくする未知の熱いものが蠢いているのが判った。金治の男が固く反つてくると、お梅は腰を沈めて導き入れた。最初は先っぽが何かにつかえてぶつかっていた。

何度も腰を入れてみると、若い粘液の中に、するりと押し込まれていた。お梅は金治の首に抱き付いてきた。金治の激しい息使いと、お梅の喘ぎ声が混じり合った。

高橋金治と澤田お梅の相寄る二つの天粹

の魂で、自在屋の宙を舞う猫のからくりが完成した。それが更なる発散される二つの天粹の力となって、新たな活躍の場、桐生の地に二人連れで流れて、舞戻るのは時間の問題であったようだ。それ程までに、お梅の兄の残した木偶の身裡を駆け巡る衝動が、二人にとって強かったのであろうか。

興行(芝居)からくりは、平成の御世になっては、既に現存していないと言われてきたが、上州桐生にて人形と背景、衣装や小道具が一式で残され現存している。今も綿々と復元され、江戸時代に消えたと思つた、興行(芝居)からくりが存在しているのである。このような例は、全国でここ桐生のみであるかもしれない。

創始者は、竹田出雲の末裔、江戸浅草奥山の人形師・竹田縫之助と伝えられている。

従来人形の動力「からくり」は、発条や系線りや人手によつて動かされてきたが、桐生の興行(芝居)からくりの場合は、浅草自在屋の興行と酷似し、本物の水車を動力として、大正五年まで動いていたのである。以降はモーター動力に転換したが、伝達機構も歯車、綱(ベルト・チェーン)を使用した。更に桐生織物の技(座繰り、八丁撚糸等)が活かされていたのである。

水車を動力源にしたものとなると、鹿児島県にも保存(国選定無形文化財)されているが、同じ水車動力のからくりでは、桐生のもものは格段に優れ、当時の織物器械技術を加味した一級の美術品と専門家の間で評価が高い。

興行(芝居)からくりは、江戸に於いても幕末から明治期に僅かに生き残っていたが、人形浄瑠璃(文楽)という芝居以外は、明治

末には生き残れずに皆衰退した。

江戸から東京の近代化の波に流されて、最後の興行となったのは、明治二十七年(一八五二年)であるが、この年に同じ出し物が桐生の天満宮の出し物として上演されている。

桐生天満宮のからくり芝居の開帳は、嘉永五年(一八五二年)に始まり、昭和三十六年(一九六一年)を最後に計八回記録に残されている。

この開帳に、高橋金治と澤田お梅の二人が絡んでいたと言つ記録は何処にもない。

だが吉兵衛の導きで、二人は桐生に移り住み、そこで祝言をあげて所帯を構え、その後、共に木偶頭を打ち、からくり人形芝居に従事していたのは紛れもない事実である。

人形やパノラマ背景についても、江戸末期の竹田芝居と元自在屋の機巧師・高橋金治の技と阿波の伝統芸能が、随所に痕跡を止めている事実は誰も否定できない。何故この地桐生にこうして浅草の技が受継がれたのか？後の歴史家の調査研究を待たねばならないが、現在もこうして遊びの心が儼然と残されているのである。

第四話了

宙乗りの猫を淫して桐生穠あき・踏墓

参考文献

- 「からくり人形展」主催 朝日新聞社(562年8月)
- 「からくり人形の文化誌」高梨生馬著 学芸書林
- 「からくり人形」鈴木一義著 大塚誠治写真 学研
- 「江戸から東京へ」浅草上」矢田挿雲著 中央公論社
- 「宇野千代聞書集」宇野千代著 平凡社ライブラリ
- 「猫にマタビの旅」出久根達郎著 文藝春秋